

【梗概】

冬の光  
―房総里見前記―  
夢酔 藤山

関東争乱(9)  
鶴谷八幡宮(12)  
割れる家(9)  
上総大乱(6)  
小弓の嵐(15)  
下総の風(11)  
賢使君(9)  
新たなる敵(13)  
鎌倉炎上(9)  
相剋のはじまり(11)  
犬掛へ(20)  
明日への飛翔(4)

―全128話―

安房国に新興勢力として派生した里見氏。その謎に彩られた、学術上〈前期里見氏〉と称された一族が、如何にして戦国大名で名を馳せる〈後期里見氏〉へと移り変わるかを描く。室町時代中期、関東の秩序である公方足利氏と管領上杉氏により混沌とするなか、伊勢宗瑞(北条早雲)が台頭してきた。これが、関東の戦国時代のはじまりとなる。

安房の国盗りを敢行し、勢力を拡大していく里見氏三代(学術上、現在は二代目ともされている)義通には、ひとつの悩みがあった。嫡男である太郎義豊の飛躍した思想である。在地豪族寄騎筆頭から、里見を中心とする集権体制である(一統)。それは、世の流れを先取りする思想であった。

里見氏を取り巻く上総の勢力は下剋上の渦中にあり、真里谷信勝は古河公方足利氏から僧籍に出された空然を祭りあげて小弓公方と為し、中原の雄たらんと策謀する。名門千葉氏も傍流・原一族の台頭で没落の一途を辿っていた。空然は足利義明を名乗り、やがて内に巣くう野心と才気を開花させ、傀儡にするはずだった真里谷信勝の野心を超えた存在に変化していく。

その最前線にある久留里城にて、里見実堯の長男・義堯は逞しく成長していた。

義通は義豊の(一統)思想を論じ、現実として求められる当主になることを望む。やがて義通は病に冒され、義豊が当主となるときがきた。心許ない義通は、実堯や正木通綱といった奉行衆を以て、義豊の抑えとする政策を敷く。実堯は兄・義通に代わり新当主を支えていく。

やがて義通は没し、義豊は目の上の瘤である奉行衆を疎ましく思い始める。そして、実権を欲する者たちと計らい、里見実堯と正木通綱を遂に殺害する。

里見義堯のもとへは義豊に不審抱く者たちが続々と参集し、遂に里見家はふたつに割れて犬掛の地で激突をする。

室町時代中期。

関東は、微妙な均衡に支えられていた。その静謐が破られたのは、秩序を統べるべき立場の鎌倉公方・足利氏の仕業といっても過言ではない。

た。癩癩持ちの将軍・義教も、その態度に怒りを覚え、機をひたすら伺った。  
両者の激突は、ささいなきっかけでよかった。  
十十十

むかし、足利尊氏を父とした兄と弟がいた。

兄は、二代室町将軍・義詮。弟は、初代鎌倉公方・基氏である。将軍家と鎌倉公方家は、おなじ出自でありながら、その置かれた立場は、兄弟として当然といってよい、大きな隔たりを宿命とされた。兄は天下を、弟は一行政官としての臣従を。これは組織を司るうえで避けられない運命である。

関東争乱(1)

夢酔 藤山

このことは、兄と弟という関係である間は、それでもよかった。

しかし、代を重ねるうちに、そのしこりは、次第に大きく増していった。

「等持院(足利尊氏)さまを同じ始祖と頂きながら、なんで我々は、将軍家の風下に立たねばならぬのだろうか」

歴代の鎌倉公方家は、その不満を常に抱いて、その恨みを太らせながら代を重ねていった。

帝や朝廷をも屈服させる三代将軍・義満の時代までは、その威光に平伏し、不満こそあれ、それを口にすることなく過ぎていった。が、抑圧が大きい分、その反動も大きい。義満以降の将軍家に対して、鎌倉公方は、露骨なまでに叛意を秘めることなく示していくのである。

室町幕府六代将軍・足利義教。

神託という名の《籤引き》で選出された還俗将軍。将軍宗家が絶えたため、僧籍にいた義満の子を幕府が担ぎ出したのだが、このことに対して、鎌倉公方は激しく憤りを示した。なぜならば、将軍職には足利一門の鎌倉公方が任命されるという期待があったからである。

「還俗将軍を据えてまで、幕府宿老はこの関東足利家を無視するつもりらしい。ならば、こちらも、その道を征かせてもらおう」

当時の鎌倉公方・足利持氏は、あらゆることに対し、悉く将軍家を蔑ろにする振舞いを続け